

旅の道連れ

戦国時代に思いを馳せて

- ①. 滋賀県・福井県の日本 100 名城・続日本 100 名城・その他の城
- ②. 桶狭間の戦い
- ③. 姉川の合戦～小谷城の戦い～一乗谷の戦い
- ④. 本能寺の変
- ⑤. 賤ヶ岳の戦い
- ⑥. 戦国武将(朝倉義景・浅井長政・柴田勝家)

車中で少し案内しようと思ったのですが、花島、平山さん共車中の文字を見ると乗り物酔いをします。
内容の浅いものですが、作って見ました参考にして頂ければ幸いです

幹事 花島

城(日本 100 名城・続 100 名城)滋賀県・福井県・他



157 八幡山城(はちまんやまじょう)

城地種類 山城

所在地 滋賀県近江八幡市宮内町ほか

築城年代 天正 13 年(1585 年)

近江など 43 万石領主となった羽柴秀吉の甥、秀次の居城として、築城され、宿老(しゅくろう)田中吉政が在城した。その後秀次は天正 18 年(1591 年)加増とともに清州城へ移封(いほう)となり、更に秀吉の養子になり関白に昇ったが、秀頼の誕生とともに失脚した。秀次移封後八幡山城には京極高次が入城したが、文禄 4 年(1595 年)廃城となった見所

かつては総石垣造りの山城であった名残の石垣が見所で、現在も壮大な雰囲気を残している。山頂からはるかに見渡す琵琶湖の眺めも絶景である。

51 安土城

城地種類 平山城

所在地 滋賀県近江八幡市安土町豊浦

築城年代 天正 4 年(1576 年)

織田信長が「天下統一」の拠点の城として、琵琶湖湖畔の標高 198m の安土山に天正 4 年(1576 年)から築城し、7 年の歳月をかけ天守が完成。金、朱、黒などに彩られた 5 重 7 階の豪壮な天守や総石垣の普請、麓(ふもと)に計画的に設けられた城下町など以後の城作りに計り知れない影響を与えた。本能寺の変後、天守を中心とした山上の建物群は焼失し、現在は天守台や主要な廓の石垣を残すのみ。近年の発掘調査と整備によって、大手道や家臣団屋敷、虎口(こぐち)跡など「幻の城」の姿が明らかにされつつある

見所

復元整備された大手道や伝家臣団屋敷を経て、天守台へと安土山中をたどれば、「幻の城」への思いは強くなる石垣の積み方が場所によってさまざまに異なる

52 観音寺城

城地種類 山城

所在地 滋賀県近江八幡市安土町石寺ほか

築城年代 建武 2 年(1335 年)? 文明 3 年(1471 年)?

創築は明らかではないが、宇多源氏(うだげんじ)の流れを汲む近江国守護佐々木六角氏の居城で、『太平記』にその記述が残る。文明 3 年(1471 年)ころから、石垣・石塁(せきるい)による城づくりが、拡張と改修を繰り返しながら進められていたと考えられる。永禄 11 年(1568 年)、織田信長が上洛する際、近隣の城を猛攻するその凄まじさに、六角義賢(ろつかくよしかた)、義治父子は城を捨てて逃げ出し、以後廃城となったとされている。

標高 433m の織山(きぬがさやま)全体に多くの曲輪(くるわ)跡が残り戦国時代の山城としては最大級の規模を持つ主郭部(しゅかくぶ)や屋敷地に築かれた高石垣は、日本の城で初めて本格的に導入されたもので、安土城の総石垣の先駆をなすものとされている

見所

織山(きぬがさやま)山中に累々と残る石垣からは、未発達ながら隅部(くまべ)に算木積(さんぎづみ)「石垣の出角」が用いられていることや、目地が通っていることなど、石積技術の高さが伺える。平井丸正面虎口に当たる石垣は城内最大規模のもので、その大きさに圧倒される。

50 彦根城

城地種類 平山城

所在地 滋賀県彦根市金亀町

築城年代 慶長9年(1604年)

彦根城は、徳川四天王の一人、井伊直政が琵琶湖湖畔の磯山の地に城を築こうとしたことに始まる。直政が死んだ為築城は計画のみに終わったが、その遺志を継いで子の直継(なおつぐ)は彦根山(金亀山こんきさん)を城地と定め、慶長12年(1607年)に天守など主要部を完成させた。築城は徳川家康の支援を受けて天下普請(てんかふしん)で行われ、また佐和山城や大津城など周辺の廃城から用材や石材などを調達、急ピッチで進められた。しかし城下町まで含む城の完成には20年あまりの年月日を要した。三重三階、華麗な装飾を施された天守は明治維新の廃城令も戦災も免れ、旧国宝保全法による城郭国宝の第一号に指定された。

天守が国宝指定された5城のうちの一つである(他は犬山城、松本城、姫路城、松江城)

見所

入母屋(いりもや)破風(はふ)、切妻破風、唐破風と多彩な様式を組み合わせた国宝天守は美しく調和がとれている。現存の天守や櫓だけでなく、復元された表御殿、玄宮園(ごんきゆうえん)や楽々園など見所は多彩である

城/3

佐和山城

城地種類 山城

所在地 滋賀県彦根市佐和山町・鳥居本町

築城年代 建久年間

佐和山城は、交通の要衝に築かれた城で、鎌倉時代の建久年間に佐保時綱によって築かれたと云われている。室町時代には、観音寺城主佐々木(六角)定頼の持城となり、大永年間には重臣小川左右大輔を城主にしている。戦国時代になると、小谷城主浅井氏の持城となり、磯野昌吉・員昌(かずまさ)が城将(じょうしょう)となり、元亀元年～天正10年にかけて織田信長と戦い、そしてついに開城した。

本能寺の変後、豊臣秀吉はこの城の立地条件から有力武将を城主に配置した。天正11年に堀秀政が5万石で城主となり、天正13年に堀尾吉晴が城主となり近世城郭へと改修が始められた。

天正18年、石田三成が194,000石(後に21万石)を領して城主となった。三成は、改めて城と城下町の整備を行ったが、慶長5年の関ヶ原の合戦に敗れ、居城佐和山城も東軍に攻められ落城した。関ヶ原の戦功により、上野高崎より井伊直政が18万石を領して入城するが、その後彦根築城により廃城となった。

見所

石田三成と居城として有名で、「治部少(じぶしょう)に過ぎたものが二つある。嶋左近に佐和山の城」と云われている。佐和山城の大手は、城山の東側に開かれ、今も田圃の中に大手門跡(表門は宗安寺に移築現存)があり、両脇には大土塁が廻らされている。この土塁の間に裏門(高源寺に移築現存)があった。また、この土塁上には多聞櫓が防

備を固め、佐和山城の威容誇っていた。(この多聞櫓は、彦根城佐和山口多聞櫓と云われている。)

佐和山城は、彦根城築城の折りに徹底的に破却されたため、山頂部の本丸一帯はもっと複雑な縄張りであっただろう。しかし、今では往時の姿を偲ぶことすら出来ない。草に埋もれて天守台石垣の一部が寂しく残っているだけだ

156 鎌刃城(かまはじょう)

城地種類 山城

所在地 滋賀県米原市番場

築城年代 文明4年(1472年)以前

山麓の蓮華寺(れんげじ)の寺伝によると、鎌倉時代の弘安7年(1284年)に鎌刃城主肥土元頼(どひもとより)についての記述があるのが「鎌刃城」に関する最古の記録である。その後、応仁、文明の乱(1467年から77年)の頃には阪田郡の国人(こくじん)堀氏の本拠となっていたとされる。堀氏は戦国時代には浅井氏に臣従(しんじゅう)し、織田氏が近江に侵攻すると浅井氏を裏切って、織田氏に降伏する。その後、堀氏は天正2年(1574年)に追放され、城は、織田氏の直轄領となり、その後まもなく廃城となったと思われる。

見所

連続する堀切や大堀切など土造りの防御施設と、枡形虎口や大石垣など石造りの施設を間近に見る事ができる。大櫓(おおやぐら)跡も想像力をかき立てる。近江では数少ない畝状堅掘(うねじょうたてぼり)群にも注目

長浜城

城地種類 平城

所在地 滋賀県長浜市

築城年代 天正元年(1573年)

長浜は古く今浜と呼ばれ、南北朝時代の建武3年に北朝方の京極高氏(佐々木道誉)が築城して、今浜氏を守将(しゅしょう)とした。その後も京極氏の家臣上坂氏・浅見氏が城将となった。戦国時代には浅井氏が勃興(ぼっこう)すると主家京極氏を圧迫しすると今浜城は浅井氏の家臣が守備するようになった。

天正元年、織田信長は浅井長政を滅ぼすと、浅井氏の旧領湖北12万石と小谷城を羽柴秀吉に与えた。秀吉は、翌2年に信長の命により交通の不便な小谷城を廃し、今浜城跡に新城を築き地名も今浜から長浜に改めた。天正10年の清洲会議の後、長浜城は柴田勝家の甥柴田勝豊が城主となるが、同年の賤ヶ岳の合戦前に勝豊は秀吉に降伏して長浜城を明け渡した。

賤ヶ岳の合戦の戦功により、長浜城は佐和山城主堀秀政に与えられ、その後天正13年に山内一豊が2万石を領して城主となった。天正18年に一豊は遠江掛川へと移ると佐和山の石田三成に与えられた。

慶長5年、関ヶ原の役後に駿河駿府より内藤信成が4万石を領して城主となるが、元和の一国一城令で廃城となった

見所

城下町長浜を散策しながら、現在は用水路となっている外堀・内外堀のラインを辿ると随所に堀跡の石碑が立てられている。特に、殿町から南呉服町近辺では往時の面影をよく残していた。

横山城

城地種類 山城

所在地 滋賀県長浜市堀部町

築城年代 永禄4年

永禄4年、小谷城主浅井長政は、南近江守護の観音寺城主六角義賢と戦い佐和山城を落とした。浅井氏の近江南進の要として、同年横山城は築かれ、浅井井演を城代とした。元亀元年、信長に反旗を翻した浅井長政は、信長とこの横山城のふもとを流れる姉川を舞台に合戦(姉川の合戦)するが、徳川家康の奮戦もあり敗れてしまう。合戦で勝利した織田信長は、横山城へ木下秀吉が城代として入城し、

小谷城の浅井長政と対峙させた。天正元年、浅井氏滅亡によりこの城の役目も終わり、長浜築城を期に廃城となった。

見所

横山城は、山頂部の「北の城」と峰づたいの「南の城」から成る。北の城からは、南に伊吹山、北に小谷城が見え、眼下に姉川の合戦跡、長浜城、そして琵琶湖が見える絶景のポイント

虎御前山

城地種類 山城

所在地 滋賀県長浜市湖北町別所

城地種類 山城

築城年代 天正元年(1572年)

織田信長によって築かれた。元亀元年(1570年)鎌刃城の堀氏を調略した信長は虎御前山を本陣として小谷城を攻めたが、この時は本格的な築城には至らず兵を引いた。

元亀元年(1570)6月、姉川の合戦で信長軍に破れた浅井長政は、小谷城に籠城する。信長は、横山城に前線基地を置き、浅井氏攻略を図るが、元亀3年(1572)7月以降は小谷城包囲のため、小谷山の眼前にある虎御前山に砦を構え持久戦に備えた。虎御前山は、四方の見通しがきく独立丘陵で、小谷城からわずか500m余りの距離に位置することから、前線基地を築くのに適していた。また、山の尾根上には古墳が点在しており、信長はこれらを巧みに生かしながら砦を構築、山全体に家臣を配置させたと考えられる

天正元年(1572年)再び小谷城に侵攻した信長は虎御前山に築城し、元亀4年(1573年)小谷城が落城するまでの間、最前線の砦として利用された。虎御前山では大規模な築城工事が行われ、木下秀吉が城番(定番)に任命されている。天正元年(1573)8月、小谷城総攻撃が仕掛けられ、9月1日に長政が自刃して浅井氏は滅亡、小谷城攻略戦に終止符が打たれ、虎御前山城は廃城となった。

見所

山の最高所に位置する「く」の字形の曲輪(くるわ)は、北・東・西の三方を高い切岸で防御されており、ここを中心に南側の砦(伝堀秀政陣・滝川一益陣)は堀切と豎堀を使った防御がなされる。また、最も小谷城に近接する伝木下秀吉陣は、三角形の曲輪を中心に、周囲に帯曲輪が巡らされるなど、ここが最前線であったことを窺わせる。

49 小谷城

城地種類 山城

所在地 滋賀県長浜市小谷郡上町

築城年代 大永3年(1523年)頃

大永年間(1521年～)、浅井亮政(あさいすけまさ)が琵琶湖を一望する伊吹山系の小谷山に築城、戦国大名浅井亮政、久政、長政3代の居城であった。3代目長政は永禄10年(1567年)織田信長の妹お市を妻に迎え、勢力の拡大を図った。しかし長政は元亀(げんき)元年、朝倉攻めに出陣した信長に突然反旗を翻(ひるがえ)す。その為信長は浅井討伐(とうばつ)に矛先を転じ、姉川で朝倉・浅井の連合軍を破ったが、小谷城を落とすまでに至らなかった。しかし信長は小谷城攻略をあきらめず、天正元年(1573年)小谷城は信長によって落城した。城の建物遺構(いこう)などは全く残らなかったが、自然地形を巧みに利用した曲輪(くるわ)や、半ば崩れかかっているものの石垣や空堀(からぼり)・土塁などが残り、戦国時代の山城の姿を伝えている

最後の城主は羽柴秀吉であるが、居城としていた期間も短く、小谷城は浅井氏の発展と共に築城し、浅井氏の滅亡と共に廃城となった。

滋賀県長浜市湖北町伊部にあった戦国時代の日本の城(山城)。城跡は国の史跡に指定されている

小谷山一帯の尾根筋や谷筋をそのまま活用した南北に長い山城で、築城当時は現在の本丸跡よりさらに北に位置する大嶽城(おおずくじよ)付近に本丸があったと考えられている。久政、長政によって代々拡張が重ねられ現在の城郭になった。落城後長浜城の建築資材とするため小谷城は解体されてしまったが、山王丸付近に現存する大石垣をみる限り当時としては先進的で大規模な城であったと推察される。

浅井氏の旧領のうち伊香郡・浅井郡・坂田郡は羽柴秀吉に与えられるが、秀吉は琵琶湖から離れた小谷城を嫌い[、1575年(天正3年)に北国街道と琵琶湖に面しており港もある今浜に新たに築城して居城とした(長浜城)。そのため小谷城は廃城となり、現代に至っている

見所

本丸を中心に浅井氏3代の歴史を偲(おも)わせるかのように、多くの曲輪、石垣、土塁が現存しており、山王丸にある野面積の苔むした石垣は迫力がある。本丸と中の丸の間にある巨大な大堀切も目を引く

140 玄蕃尾城(げんばおうじょう)

城地種類 山城

所在地 滋賀県長浜市余呉町柳ヶ瀬地先

築城年代 天正10年(1582年)

天正10年(1582年)柴田勝家により築城された。翌11年3月、勝家は豊臣秀吉と対決すべく玄蕃尾城に本陣を置き、周辺一行市山(ぎょういちやま)砦などの陣城(じんしろ)を築かせた。4月に秀吉の軍勢が大垣に出陣した隙(すき)をついて、勝家も軍を率いて攻撃にかかった。だが秀吉軍の反撃にあい勝家軍は総崩れとなって北庄城へ敗走した「賤ヶ岳の戦い」戦後は再利用されなかった為、勝家本陣時代の陣城としての遺構が残る

見所

枡形虎口を始め、曲輪や土塁、馬出、空堀などの遺構が極めて良好な状態で残されており、賤ヶ岳城塞(じょうさい)群の陣城としてはもっとも縄張的にも高度で、かつ保存状態も良好。典型的の織豊期の臨戦の城の実態を見る事ができる。

139 佐柿国吉城(さがきくによししろ)

城地種類 山城

所在地 福井県三方郡美浜町佐柿

築城年代 弘治 2 年(1556 年)

若狭守護武田氏の重臣粟屋勝久が築城したと伝わる。永禄 6 年(1563 年)以降、越前の朝倉氏は度々若狭侵攻を繰り返したが、国境の城である佐柿国吉城は毎回これを撃退し、難攻不落を誇った。粟屋氏は元亀元年(1570 年)4 月には越前に出陣してきた織田信長と徳川家康の連合軍を佐柿国吉城に迎えた。信長・秀・家康が揃って朝倉攻めに
出陣している。その後天正 11 年(1583 年)には秀吉の家臣木村定光が城主となり城下町など整備が江戸時代初期に
廃城となった。

見所

登城道を登るとその難攻不落ぶりを実感できる。全てが土造りではなく、本丸周辺や城主居館周辺部には石垣が併用されている点が特徴である。本丸北西虎口には鏡石も見られる。

⑨ 越前大野城

城地種類 平山城

所在地 福井県大野市城町

築城年代 天正 4 年(1576 年)以降

天正 2 年(1574 年)に起こった越前の内乱を鎮圧した織田信長の家臣金森長近(かなもりながちか)は、その功により越前大野郡の約 3 分の 2 を与えられた。長近は亀山に大野城を築いて領国支配の本拠地とした。大野城主その後長谷川秀一、青木一矩(かずのり)を経て、信長の孫にあたる織田秀雄(ひでかつ)へと交代した。江戸時代に入ると、大野城は越前松平氏の支城となるが後に大野藩として独立。天和(てんな)2 年(1682 年)の譜代の土井利房が城主となり、幕末まで土井氏が藩主が続いた。

見所

四階展望台からの眺望。城内には金森氏・土井氏の武具や什器を展示している。本丸の石垣は野面積で、江戸時代の形をのこしている。年間 10 日間程であるが、天守が雲上に浮かんだ景色を近くの山から見も事が出来る(雲海)

勝山城

勝山城は、戦国時代の天正 8 年(1580 年)に柴田勝家の一族である柴田勝安によって築城された。信長公記では勝山城城主は原長頼と思われる。

天正 11 年(1583 年)、越前を丹羽長秀が領すると、その家臣の成田道徳が城主となり 4 万 5 千石を知行した。天正 13 年(1585 年)、成田は丹羽家の内紛などにより出奔した。

江戸時代に入ると、慶長 6 年(1601 年)福井に封じられた結城秀康の支配するところとなるが、寛永元年(1624 年)松平直基が 3 万石をもって封じられると、勝山藩の藩庁が置かれた。その後、松平直良が入るが、正保元年(1644 年)直良が移封されると廃城となり、勝山の地は天領となった時期もあった。

元禄 4 年(1691 年)に小笠原貞信が 2 万 2 千石で勝山の地に封じられ、以後明治維新まで小笠原氏 8 代がこの地を治めた。宝永 5 年(1708 年)には、城址への築城許可が下り、7 代藩主小笠原長貴の代に完成を見た。文政 5 年

(1822 年)に、本丸より出火し、門、高塀、土蔵を残して焼失したが、文政 9 年(1826 年)に再建された。明治時代に廃城となった後、城の建物は取り壊された。

現在の勝山市役所付近が城跡中心部で、市役所と公民館があるあたりが本丸跡であり、市役所前の道路付近に堀が設けられていた。天守台や石垣が昭和 40 年まで残っていたが、市民会館建設に伴い撤去され、現在は市民会館敷地に城址の碑が建つのみである。城跡近辺に、姫路城に似た日本一の高さの模擬天守を持つ勝山城博物館が建てられているが、歴史上の勝山城とは位置・形式ともに関係はない。

現存する建物としては、成器堂の講堂、演武場、表門、土蔵がある。成器堂の建物は 1879 年(明治 12 年)に取り壊され、払い下げられた。講堂が神明神社社務所、演武場が布市の道場、表門、土蔵が今井家表門・土蔵として移築され現存する

37 一乗谷城

城地種類 山城(麓(ふもと)に居館(きょかん))

所在地 福井市城戸の内町

築城年代 15 世紀後半

一乗谷城は、戦国大名朝倉氏の館だけでなく城下町と 4 つの山城を含む縄張りを指す。その歴史は文明 3 年(1471 年)、朝倉孝景が越前守護斯波(しば)氏を破って一乗谷沿いの天然の要塞を拠点としたことに始まる。そして一乗谷には 2 つの城戸(きど)に挟まれた約 1.7Km の細長い城下町が、全国に先駆けて形成された。

一乗谷は、応仁の乱を逃れてきた京都の文化人たちなどにより越前の中心地として栄えたが、天正元年(1573)、織田信長の軍勢により放された火によって灰燼(かいじん)に帰した。

見所

しかし現在は、武家屋敷や街並みが復原され、当時の様子を偲ぶことが出来る

137 北ノ庄城

城地種類 平城

所在地 福井市大手

築城年代 天平 3 年(1575 年)

越前北ノ庄を与えられた柴田勝家は自ら縄張りして北ノ庄城を築城した。勝家は天平 11 年(1583 年)の賤ヶ岳の戦いで敗死し、北ノ庄城も焼失する。その後慶長 5 年(1600 年)に徳川家康の二男結城秀康がこの地に入り、翌年から 6 年がかりで北ノ庄城を拡張して、全国諸大名の天下普請(てんかぶしん)による新たな城が築かれた。秀康は越前松平氏を名乗り、3 代松平忠昌の時、城名を「福居城」と改名した。創建時の四重天守は寛文 9 年(1669 年)焼失した。

北ノ庄城の歴史は柴田勝家の時代から遡ること更に約 100 年、文明年間に朝倉貞景の二男・頼景が北ノ庄遠江(とおとうみ)守と称して、北ノ庄に館を定めたのが始まりとされ文明 3 年(1471 年)朝倉孝景が居城を足羽川(あすわかかわ)上流の一乗谷に移すと、北ノ庄は北方の守りを固める重要な拠点になったと考えられる

天正元年(1573 年)信長に一乗谷城を攻められ、朝倉頼景依頼 6 代続いた北ノ庄朝倉氏は滅亡した。

しかし、朝倉頼景の館や柴田勝家の北ノ庄城の位置は定かではない。北ノ庄城の場合は福井城の南約 500m の柴田神社付近に石垣の根石と考えられる石が発見されたことから、柴田神社付近が本丸跡と推定される。

現在の柴田神社は繁華街の一角にあり、平城。当時信長が琵琶湖を背にした平山城の安土城を築き、家臣の明智光秀が水城の坂本城を築いた時代にあって、柴田勝家は足羽川(あすわかかわ)の湿地帯を利用した地形に築いたで

あろうことは想像がつくが、現在の地形からは窺(うかがい)知(し)ることは出来ない。

お市は、永禄 10 年(1567 年)小谷城の浅井長政に嫁(よめ)いたが、天正(1573 年)8 月 20 日小谷城が落城(らくじやう)し、浅井長政が自刃(じじん)した後、三人の娘と共に岐阜城で過ごしたと伝えられ居(ゐ)てる。

見所

広大な城域に残るものは本丸周辺のみながら、まず満々と水を湛(た)える堀が城の風景としい見事である。青緑色が美しい笏谷石(しゃくたにいし)で築かれた壮大な高石垣と天守台は圧巻である。御廊下橋(おろうかばし)も格式高く見応えあり

36 丸岡城

城地種類 平山城

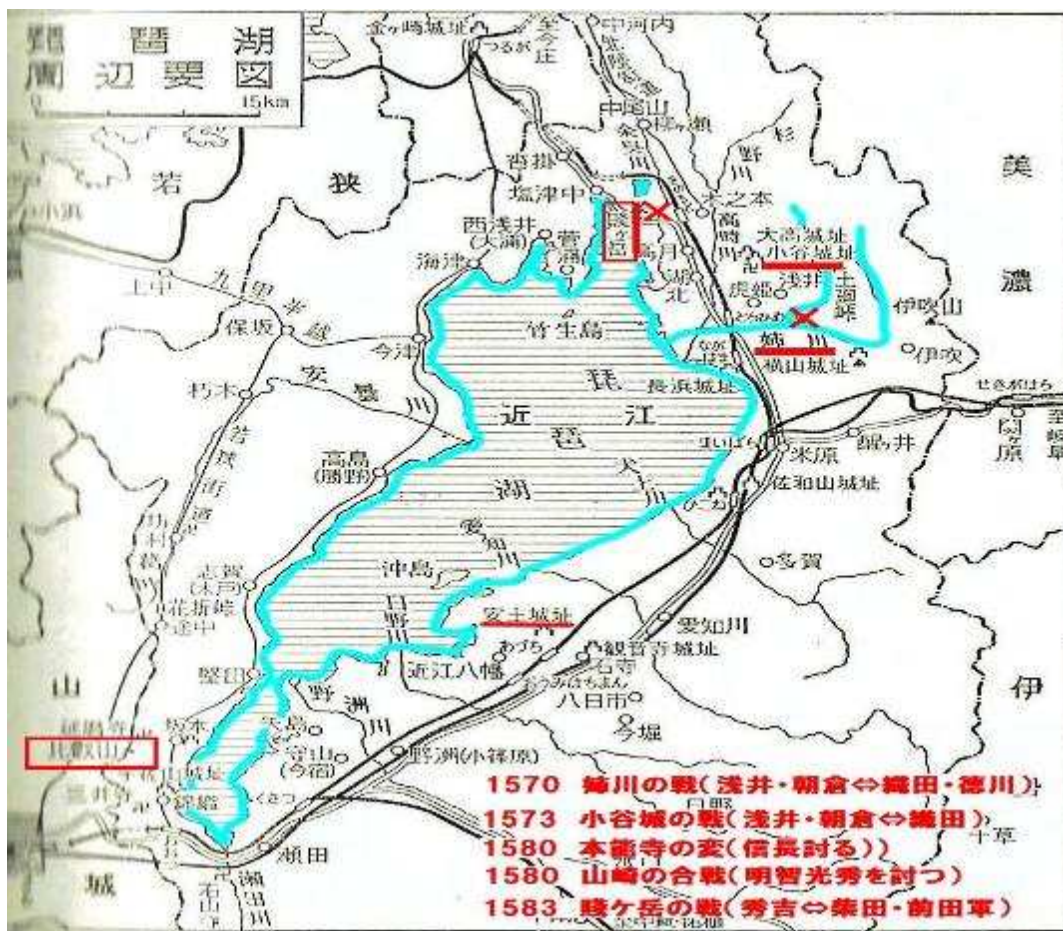
所在地 坂井市丸岡町

築年代 天正 4 年(1576 年)

柴田勝家の甥・勝豊が築いたとされて、天守は現存する最古のものといわれている。その一方で、天守の構造分析などから慶長 18 年(1613 年)頃の説もある。小高い丘に位置し、五角形の内堀に囲まれた中に、本丸や二の丸があった。天守の屋根瓦は笏谷石(しゃくたにいし)製で、天守に石瓦を使用した現存例はここだけである。一重目の大きな入母屋派風(いりもやはふう)や、柱や長押(ながし)を白木のまま見せる三階などの天守の古風な格式を高めている。創建以来火災にあうことはなかったが、昭和 23 年(1948 年)の福井地震によって倒壊可能な限り倒壊前の建材を活用して再建された。

戦国年表

西暦一月	和暦	出来事
1560-05	永禄 3 年	桶狭間の戦い 今川義元死去
1567-08	永禄 10	信長 斎藤氏滅亡させる
1568-08	永禄 11	信長妹お市の方が浅井長政に嫁ぐ(政略結婚)
-09		信長足利義昭を奉じて入京(戦国時代終わる)
1569-10	永禄 12 年	信長足利義昭と不和
1570-06	元亀 1 年	姉川の戦い(浅井・朝倉軍⇄織田・徳川軍)・・・織田軍勝利
1571-09	元亀 2 年	比叡山焼き討ち(浅井・朝倉かくまう)
1573-07	天正 1 年	信長、義昭を追放(室町幕府滅亡)
-08		小谷城の戦い 信長、朝倉義景・浅井長政滅亡させる (一乗谷落城朝倉義景自決、小谷城落城浅井長政自決)
1576-04	天正 4 年	信長、安土入城
1582-06	天正 10 年	本能寺の変 信長死去 秀吉、明智光秀を討つ(山崎の合戦) 清州会議開催、
1583-04	天正 11 年	秀吉、賤ヶ岳の戦い(秀吉軍⇄柴田・前田軍)で柴田勝家を討つ(前田離脱)
1583-05		秀吉、大阪城築城
1585-07	天正 13 年	秀吉、関白となる



桶狭間の合戦

1560年(永禄3年)5月19日、日本の歴史を動かす大きな合戦が起こりました。「桶狭間の戦い」です。27歳の織田信長が4,000人ばかりの兵を味方に、2万5千人もの今川義元軍に戦いを挑み、勝利しました。その歴史的な合戦には、世代を通じて胸が熱くなるドラマがあります。このような歴史的瞬間が今もなお語り継がれるのは、それを記録する人物がいたからです。その人物の名は「大田牛一」(おおたぎゅういち)。彼は、織田信長の家臣でした。最も身近な距離で、織田信長を知ることができた人物が書きつづった記録「信長公記」。織田信長が天下統一への切符を手に入れた軌跡と今川義元の敗因はどのようなものだったのでしょうか。今、「信長公記」によって桶狭間の戦いの全貌が明かされます

なぜ桶狭間の戦いが起こったか

そもそも、なぜ桶狭間の戦いが起こったのか。まず、駿河の大名だった今川義元。今川義元は、甲斐の武田信玄、相模の北条氏康と同盟関係にありました。これを「甲・相・駿三国同盟」と呼びます。さらに、北には越後の上杉謙信がいました。

今川義元が「尾張を攻めよう」と考えるきっかけになったのは、織田信長の父である織田信秀の死です。これにより家督を受け継いだ信長ですが、家督を受け継いだ当時はまだ名もなき一国の領主。当時の今川義元にとっては「赤子の手をひねるようなもの」と考えていたのでしょう。今川義元はじわじわと尾張に近づいていき

ました。そして、1560年(永禄3年)5月19日、ついに尾張を手に入れるため今川義元が動いたのです。これが、のちに桶狭間の戦いと呼ばれる歴史的合戦となります。

桶狭間の合戦の前夜

桶狭間の合戦前夜、織田信長はこのような大切な日にもかかわらず家臣を家に帰しました。これは家臣の中に内通者がいることを警戒してのことです。家臣が帰ったあと、「信長公記」によると織田信長は能を謡い舞ったことが記されています。「人間五十年、下天のちを比べれば夢幻の如くなり」これは、織田信長の十八番、人の世の儚(はかな)さを謡った能・「敦盛」の一節です。この一節だけを見ると、信長が死も覚悟していたようにも思えますが、真相は本人にしか分かりません。

ときは来たりいざ合戦

1560年(永禄3年)5月19日の午前3時、今川軍は織田方の砦へ攻撃を開始。これは、前日に今川方で練られた作戦通りの行動でした。そのとき、織田方の兵力は1,000足らず。もはや勝ち目はないと思われました。しかし、これは織田方の作戦。そのときに攻められた砦は、大高(おおだか)城でしたが、そこに今川方の兵が集中しすぎました。そのため、今川義元に付いていた兵は、手薄になっていました。これが、織田信長の真の狙いでした。25,000人の兵が相手なら、いくら織田信長でも勝てません。しかし、兵力が分散されたなら、話は別。「狙うは今川義元ただ1人」と、今川義元に狙いを定めるチャンスが訪れつつあったのです。

今川義元の首を討ち取ったり

1560年(永禄3年)5月19日の午前4時、織田信長出陣のとき。織田信長は先頭を切って清洲城を飛び出したことが「信長公記」に記されています。あとに続いた軍勢はわずか5人。織田信長は今川義元を探するため、ある作戦を立てていました。信長に続いた軍勢は5人でしたが、実はその他にもいくつかの集団に分かれて城を出発しています。向かうは清洲城の南に位置する熱田神宮。午前8時、織田信長と付きしたがった武者達が熱田神宮に到着、その他の軍勢も次々に到着しました。熱田神宮に集まった軍勢は約1,000人。織田信長は今川方に自分達の動きを知られないように、兵を細かく分散させ、熱田神宮に集結させたのです。織田信長はここで、今川義元がどこにいるのか探らせました。さて、今川義元はどこにいますでしょうか。

今川方の動向

織田方が熱田神宮に集結し今川方の動向を探る一方、今川義元は沓掛城を出発。織田方の領内へさらに深く駒を進めていました。その進軍中、織田信長が熱田神宮を出発、向かうは善照寺砦です。善照寺砦と沓掛城は目と鼻の先でした。善照寺砦へ向かう頃、織田信長の軍は徐々に兵力を伸ばし3,000人以上に。織田方へさらに深く駒を進めていた今川方は、織田方の砦を2つ攻め落としています。この時点では、勢力範囲を広げている今川方が有利。この一報は、織田信長の耳にも伝えられました。今川方は、25,000人の兵のう

ち、織田方の砦を攻めるの 10,000 人、後方の守りなどに 10,000 人をあてています。そのため、今川義元に付いている兵は 5,000 程。今川義元のみを狙っていた織田方にとってはとても有利な状況となっていました。

今川義元を桶狭間で発見

1560 年(永禄 3 年)5 月 19 日の正午頃、今川義元は手薄になった兵を引き連れて桶狭間に到着。300 人の織田兵を撃退し、織田方の砦を 2 つ攻め落としたことに満足していた義元は、桶狭間で休憩を取り、酒を飲んでいました。その一報は、即座に織田信長の耳に。それを伝えたのは、今川方の兵と見せかけて織田信長に付いていた内通者でした。とうとう、織田信長は計算どおりの戦略で今川義元の居場所を突き止めたのです

織田信長最後の作戦

桶狭間は文字通り「狭間＝谷」だと推測されていましたが、実は「山」。これは「信長公記」にも記されています。今川義元が討ち取られた場所は「桶狭間山」でした。今川義元を討ち取るために、織田信長は最後の作戦を実行させます。その作戦とは、善照寺砦にたくさんの「のぼり」を立てること。善照寺砦と桶狭間は目と鼻の先にありました。そのため、桶狭間から見ると、織田軍がそこにいるように錯覚させることができます。これが、織田信長の最後の作戦。これにより、織田信長は今川義元に悟られることなく、桶狭間へ駒を進めることに成功しました。

今川義元討ち取ったり

さあ、桶狭間の戦いが始まります。今川義元がいる場所は山。山の天辺(てっぺん)から下は丸見えです。そのとき、天は織田信長に味方しました。黒い雲が桶狭間山の周辺を覆ったのです。これは、織田信長にとって好転機。周りが暗くなることで、山の天辺から織田軍が見えにくくなります。「いざ出陣！」織田信長が今川義元の本陣に向けて動き出しました。雨が降り出し、それが強くなってきた頃、今川軍は雨にぬれることを嫌い散り散りに。これにより、今川義元の兵はさらに手薄になっていました。そのときです。織田軍が今川軍に襲い掛かりました。敵は善照寺砦にいとばかり思っていた今川軍は突然のことに大混乱となりました。織田信長軍のひとり「毛利新介」が乱闘の間をすり抜け、義元のもとに猛進。「狙うは今川義元の首ひとつ」と信長は兵の全員に伝えていました。「今川義元、討ち取ったり」。今川義元はついに、尾張の織田信長に敗れました。これが、桶狭間の戦いの全貌です。



姉川の戦いから小谷城の戦い、一乗谷の戦い

小谷城の戦いとは？浅井長政最後の決戦

小谷城の戦いは、浅井長政の居城「小谷城」で織田信長と戦うことになった。

この小谷城の戦いの結果、戦国の世の中の流れが大きく変わりはじめていくことになるのです。

この戦いのあと、織田家の子孫、浅井家の子孫が豊臣家や徳川家、さらには天皇家、公家たちにも及んでいくのです。戦国末期以降、現在まで、その時代その時代で活躍した有名な人物たちは、織田家と浅井家の血を引いている人たちが多いのです

姉川の戦いが起きた理由とは

織田信長は、美濃の斎藤氏を攻略することができず、やきもきしていました

北近江(現在の滋賀県北部)の浅井長政という人物を味方につければ、美濃攻略にも有利で、かつ、京にも上りやすいとわかり、浅井長政を味方にする策を考えるのでした

信長は、妹の「お市」を長政に嫁がせ、浅井家と姻戚関係、同盟関係を結び、見事、浅井家を味方することに成功した

この時、浅井家側の盟友である「朝倉家」は、織田信長と敵対していました。浅井家が信長と親しくなるのを快く思っていなかった。信長は、朝倉は攻めないと約束したうえで、「それなら！」と浅井長政は、織田との同盟に同意。その後、織田信長は、足利義昭を連れて上洛、義昭を足利15代将軍にすることに成功する。

信長は、朝倉氏を攻略するために、足利義昭の命令と称して、朝倉義景に上洛するように、再三に渡り、通達。

しかし、この命令には、朝倉義景が拒否し続ける。いくら足利義昭の命令と言っても、操っているのは、織田信長であることは明白で、従うことは、信長の軍門に下ることを意味している。織田と敵対していた朝倉氏は、拒否せざるを得なかった。このことがきっかけで、信長は、しびれを切らし、とうとう、浅井長政との約束であった、朝倉を攻めないという約束を破り、朝倉義景を攻めることにした。

これを知った浅井長政は、信長を裏切り、朝倉義景とともに、信長と戦うことを選んでしまう。

長政は、信長の背後をつき、信長たちは、まさかの長政の裏切りのため、総崩れとなり、最大のピンチを迎えてしまう。

信長は、長政の裏切りに激怒し、浅井長政を滅ぼすべく、長政の居城である「小谷城」へと 20,000 の兵を率いて向かった。これが、姉川の戦いへとつながる。

織田信長は、浅井長政の裏切りによって、ピンチを迎えました。信長は、このピンチを脱するため、同じく同盟関係であった、「徳川家康」に援軍を頼みます。信長は、長政の居城「小谷城」を目指し、20,000 の軍勢で向かい、家康も、5,000 の兵を率いて、小谷城の麓(ふもと)、姉川の南岸へとかけつけます。

一方の浅井長政は、朝倉義景の援軍 8,000 の兵とともに、姉川の北岸まで進みます。姉川をはさんで両者が激突することになるこれが、姉川の戦いです。元亀元年、1570 年の 6 月 28 日にその戦いは行われました。場所は、現在の滋賀県長浜市姉川河原あたりとされています。

姉川の合戦

1570年(元龜1)6月28日、近江(おうみ)(滋賀県)の姉川畔で繰り広げられた浅井・朝倉連合軍と織田・徳川連合軍の戦い。戦いのあった場所の地名をとって、野村合戦とも三田村合戦ともよばれる。戦いの発端となったのは同年4月、信長が越前(えちぜん)(福井県)の朝倉義景(よしかげ)を攻めたとき、朝倉氏との旧誼(きゅうぎ)によって浅井長政がそれまで同盟を結んでいた信長に反旗を翻したことにある。信長は妹婿(いもうとむこ)である長政の謀反(むほん)を怒り、6月19日岐阜を出陣した。援軍である徳川家康の軍勢とあわせ、その数34,000といわれている

それに対する長政も義景の援軍を求め、その数21,000と数えられている。戦いは6月28日早朝から姉川を挟んだ形で繰り広げられ、初め浅井・朝倉軍が優勢であったが、家康軍の善戦により織田・徳川連合軍の大勝利に終わった。義景の援軍は越前に敗走し、長政の軍勢も小谷城(おだにじょう)に逃げ込み浅井、朝倉両氏の滅亡の遠因となった。姉川をはさみ、浅井・朝倉連合軍、織田・徳川連合軍が激突します。



姉川の戦いはどうなったか

最初は、両軍とも、にらみ合いでしたが、しかけたのは、徳川家康の家臣、徳川四天王のひとり、「榊原康政」でした。家康は、浅井・朝倉連合軍が、縦に伸びて散らばっていることに気づき、榊原康政に、「横を突け！」と命令したためです。この作戦は、成功し、浅井・朝倉連合軍は、横を突かれ、総崩れとなった。これにより、浅井・朝倉連合軍は、大敗を喫し、討死(うちじに)した数、1,000人以上(諸説有り)にも上ったとのこと。このとき、長政の弟・政之が討死しています。

この姉川の戦いで、姉川は、討死した武将たちの血で、真っ赤に染まったとのこと。

この戦いにより、浅井家は、家族や優秀な家臣たちを失い、急速に勢力が弱まっています。

そして、いよいよ、浅井家滅亡へとつながる、「小谷城の戦い」へと流れていくのです。

田信長軍のひとり「毛利新介」が乱闘の間をすり抜け、義元のもとに猛進。「狙うは今川義元的首ひとつ」と信長は兵の全員に伝えていました。「今川義元、討ち取ったり」。今川義元はついに、尾張の織田信長に敗れました。これが、桶狭間の戦いの全貌です。

小谷城の戦いとは

姉川の戦いから小谷城の戦いまで

浅井長政や朝倉義景をはじめ、室町幕府の15代将軍になった足利義昭は、最初こそ、将軍にしてもらった恩もあり、信長鼻肩(ひいき)を装っていましたが、腹の底では、自分より力があり、目立つやつは許せん！と思っていたのです。足利義昭は、室町幕府の将軍であることに誇りを持ち、衰退した室町幕府の再興を願っていた室町幕府が衰退していたとしても、名声的には、足利義昭が、当時のナンバー1だったはず。

義昭は、自分が出す命令は、どんな大名であろうと従わねばならぬと思っていたのです。いつかは、信長を滅ぼさなければならぬと考えていました。しかし、現実的に、自分には、兵力のある味方が少ないということが分かっていたのです。あるときには、上杉謙信、武田信玄にすがったり、朝倉義景や毛利氏を頼ったりしていくのです。さらには、石山本願寺の代表である「顕如(けんによう)」にも頼っていくのです。

いよいよ、織田信長を潰(つぶす)すべく、頼った武将や石山本願寺の顕如に、「信長を攻めろ！」と命令をくださるので。命令された諸大名や顕如たちは、外見(がいけん)では、足利義昭に従う体を見せますが、本当は、信長を滅ぼす好機ととらえていたのです。顕如も、信長と10年に渡り、対立していました。顕如は、浄土真宗で民衆を導きたいと思っていましたが、信長は、宗教など関係なく、武力で世の中をまとめていく方針のため、かねてから、信長とは考えが合わなかったですから、顕如も義昭の命令に従ったのです。

姉川の戦いが終わってから、織田信長は、足利義昭が信長を攻めろという命令に従った、武田信玄、毛利氏、朝倉義景、浅井長政、そして、石山本願寺の代表である。「顕如」らに囲まれ、睨(にら)まれていたのです。これが、信長包囲網と呼ばれるものです。これによって、信長が苦しめられていくのです。この信長包囲網は、武田信玄が病で亡くなるまで続いたと言われています。

比叡山焼き討ち

信長包囲網により、信長は苦しめられますが、その間にも、信長は勢力を拡大するため、三好三人衆を攻めるため、摂津(現在の大阪府と兵庫県の一部)に出向いていました。これを「野田城・福島城の戦い」といいます。

これを好機ととらえ、浅井長政と朝倉義景が織田信長の留守中に最前線を突破することに成功し、京へ攻めかかります。これを聞いた信長は、浅井長政と朝倉義景の軍勢を迎えるべく、戻ります。しかし、浅井長政と朝倉義景は、比叡山延暦寺の勢力を味方にし、比叡山に逃げて行きました。

信長は、比叡山の勢力に対し、浅井長政・朝倉義景に味方するならば、比叡山を焼き尽くしてしまうぞと脅します。しかし、比叡山方は、まず、そんなことは起こるはずがないと考え、そのまま、浅井長政・朝倉義景の味方についたのです。比叡山の反信長勢力が増えてきたこともあり、とりあえずは、信長は停戦したのです。

これを「志賀の陣」と呼んでいます。

しかし、このことで、信長の怒りに火をつけてしまうのです。

あの「比叡山延暦寺の焼き討ち」が行われてしまったのです。このころから、信長の家臣たちにも、少しずつ疑心されだしていきます。このことで、信長に恐怖した磯野員昌(いそのかずまさ)や宮部継潤(みやべけいじゅん)ら浅井家家臣たちは、織田家に降伏し、徐々に浅井家の基盤がゆるぎ始めるのです。

一乗谷城の戦い

織田信長は、足利義昭を京都から追放し、浅井長政の家臣が続々と降伏(こうふく)して来たことから、一気に浅井長政を責め滅ぼそうと考え、30,000の兵を率いて、小谷城の要所「虎御前山(とらごぜんやま)」に陣を敷きます。

そこに、援軍で駆けつけた朝倉義景ら 20,000の兵を率いて小谷城の北部まで進んでいきます。

しかし、織田の軍勢に敗北し、命からがら逃げてきた朝倉義景は、居城「一乗谷城」にたどり着きますが、信長に猛追され、一乗谷城を焼き払われてしまうのです。

朝倉義景は、味方の裏切りにもあい、炎上している一乗谷城で自害して果てたのです。

享年41でした。これにより、名門朝倉家は滅亡してしまうのです。朝倉義景の首は信長家臣の長谷川宗仁によって、京都で獄門に曝(さら)されたそうです。そして、いよいよ、残るは浅井長政の首のみと、信長は、小谷城へと向かうのでした。

小谷城の戦いはどうなった

一乗谷城の戦いで、盟友(めいゆう)・朝倉義景を失った浅井長政は、落胆した。続々と織田方に寝返る家臣たちも増え、浅井家は、どんどん弱体化していった。

織田信長は、朝倉義景を攻めたあと、小谷城を目指し、一気に浅井勢を攻め滅ぼしてしまう。天正元年(1573年)8月に起きた、これが、小谷城の戦いなのです。小谷城での籠城も最初は、そこそこ奮戦(ふんせん)していましたが、30,000に対して、5,000の兵で、勝負は最初からついていたのです。そして、浅井長政の父・浅井久政は、小谷城の小丸で自害します。その後、浅井長政は、妻のお市の方と娘の茶々・初・お江を信長に返し、自害してしまうのです。享年29でした。これにより、浅井家も滅亡してしまう。

自害した、浅井長政、父・久政の首は、朝倉義景と同じく、京都で獄門にさらされました。長政の息子「万福丸」も、関ヶ原で磔(はりつけ)、親族の浅井亮親らも処刑されました。朝倉義景、浅井長政、浅井久政の頭蓋骨(づがいこつ)は、又、長政・久政の頭蓋骨に金箔と漆(うるし)を塗って、宴の肴にしたというエピソードは、有名です。

これにより、さらに、信長の残虐さや、狂気ぶりに家臣たちも震え上がった。

一乗谷の戦い

一乗谷城の戦いは、天正元年8月(1573年9月)に織田信長と朝倉義景の間で行なわれた合戦である。但し一乗谷城での攻防は極めて限定的であったため、激戦地の名を冠して刀根坂の戦いとも呼ばれる。織田信長の越前侵攻に対し、近江から一乗谷に撤退した朝倉義景は、一乗谷も捨てて六坊賢松寺に逃走。信長は一乗谷に乗り込み、100年に渡って繁栄を誇った一乗谷の町を焼き払った。

一乗城山に築かれた一乗谷城や、朝倉氏が居住していた朝倉館、有力家臣らの武家屋敷など一乗谷城下町の多くの建物が、信長により灰燼(かいじん)とされてしまい、敗北した義景は自刃した。織田と朝倉の戦いがはじまったのは、元亀元年(1570)年の金ヶ崎の戦いです。このときは途中で信長と同盟関係にあった浅井長政が裏切り、織田軍は撤退しています、

その後、信長はすぐに報復にでて同年6月に姉川の戦いが勃発。浅井・朝倉連合軍は信長に敗れましたが、その敗北は“致命的”と言えるほどではありませんでした。その証拠に、9～12月の志賀の陣では信長を追い詰め、持久戦に持ち込んでいます。その後もしばらく、両者の対立は続きました。

この頃は信長と将軍足利義昭が不和となり、義昭を中心とする反信長勢力が構築されていました。いわゆる「信長包囲網」です。浅井・朝倉氏のほか、武田信玄や本願寺勢力、比叡山延暦寺などの多くが信長を苦しめました。しかし、元亀4年(1573年)、に入って大きな変化が訪れます。4月には反織田の最大勢力だった武田信玄が突如病死。これをきっかけに信長は反撃に転じ、7月の榎島城の戦いで将軍義昭を京都から追い出し、ここに約240年続いた室町幕府を滅ぼすのです。信長は8月4日に本拠・岐阜城へと戻りますが、4日後に浅井氏の配下にあった山本山城主の阿閉貞征(あつじ・さだゆき)が、信長方に寝返ったという報せが届きます。これを浅井攻めのチャンスと捉えた信長は、その日の夜のうちに岐阜を出発するのです。

小谷城を中心に織田・朝倉両軍がそれぞれ布陣

8月10日、約3万という大軍勢の信長軍が浅井氏の居城である小谷城下へと到着。一方で朝倉義景も浅井長政から援軍の要請を受けて、約2万の兵(5・6千との見方も)を率いて小谷城の救援に向かいました。信長は小谷城周辺に軍勢を集めると同時に、その北西に位置する山田山にも兵を集結させ、その西の高月に本陣を構えました。信長は朝倉の救援軍が向かってくることを事前に察知していたようです。山田山は小谷城を見下ろせる場所にあり、ここを取ることで義景を小谷城へと近づかせないようにしたのです。信長軍の布陣が終わると間もなく、義景軍が余呉・木ノ本(いずれも現滋賀県長浜市)付近に着陣しました。また、義景軍は本陣の他に、小谷城と峰続きの大嶽砦(おおずくとりで)とその麓にある丁野山砦(よおのやまとりで)にも兵を置いていました。ちなみにこの頃、浅井方の家臣の離反が相次いだようです。まず月ヶ瀬城が開城となり、続いて12日には大嶽砦の麓にある焼尾城の浅見対馬も信長に降伏して織田方の城となっています。

8月13日の「刀根坂の戦い」で朝倉軍は壊滅状態に

自ら少数の兵を率いて大嶽砦に夜討ちを仕掛けて陥落させると、翌13日には丁野山砦も簡単に降伏させ、山田山にいる家臣たちに「朝倉が退くのを見たら追撃せよ」という指令を出すのです。信長はこの時点で「義景軍は越前へ逃げるだろう」と推測していました。義景の戦いっぷりを、これまでに見てきましたからね。指令は再三出されたので、信長には確証があったのでしょう。指令を受けた当の家臣たちは、半信半疑だったようですが……。13日夜中になると、義景軍は信長の想定したとおりに撤退を始めます。信長は馬廻を引き連れ、いち早く義景軍を追いましたが、一方で油断をしていた家臣たちは、すぐには義景軍を追撃できませんでした。その後、家臣たちは信長に激怒されますが、その中で佐久間信盛だけが思い上がった弁明をして火に油を注いだ話は有名です。それはさておき、木ノ本近くの地蔵山で家臣たちは、なんとか信長と合流します。そして刀根坂(現福井県敦賀市)の地で、義景軍に追いつきました。一乗谷の戦いで激戦が繰り広げられたのが、この「刀根坂の戦い」です。追撃を逃れようとする朝倉軍に対し、一方的に攻勢を加える織田軍。一度退却した朝倉軍はもはや統制もとれず、まともに戦える状況ではなかったようです。その結果、朝倉軍の主だった武将(朝倉景氏・朝倉景冬・朝倉景行・山崎吉家・鳥居景近・託美(たくみ)越前守・印牧(かねまき)弥六左衛門など)が討ち取られます。『信長公記』によると、信長軍が討ち取った敵の首は3,000を超えたとか。ちなみにこのときの戦いで、浅井長政は朝倉の救援に向かっていません。どうやらそんな余裕はなかった

ようです。その後の信長はそのまま勢いを保って越前国に侵入し、14日に敦賀城を難なく陥落させています。一方で義景は、15日に一乗谷にまで退却しますが、迎えた家臣たちの少なさに「もはやこれまで」と自刃しようとしたとか。いかに刀根坂での惨敗が大きかったのかが伺えます。

義景、同族の裏切りで最期を迎える

その後、信長はそのまま勢いを保って越前国に侵入し、敦賀城を難なく陥落させると、8月17日には木ノ芽峠(現福井県敦賀市・南条郡南越前町)を越えます。3年前の金ヶ崎城の戦いでは浅井長政の裏切りにより、越えることのできなかった峠です。18日には越前府中(現福井県武生市)にまで進み、龍門寺に着陣。柴田勝家に対し、朝倉氏代々の本拠地・一乗谷に進撃することを命じました。一乗谷は信長方によって焼き払われ、三日三晩にわたって燃え続けたといわれます。しかも焼き払ったのは、義景が頼りにしていた平泉寺(へいせんじ)の衆徒でした。彼らも信長の圧力に屈したようです。逃げに逃げ、裏切りに次ぐ裏切りを受けた朝倉義景。最後まで彼につき従ったのは、わずか十数名だったといわれています。はあ……なんともやりきれない。その後、景鏡は義景の首を信長の本陣に差し出し、さらに義景の母とまだ幼い嫡男・愛王丸を探し出して殺しています。まさに戦国時代といったエピソードです

朝倉孝景以来、斯波(しば)氏に代わり、越前の守護を代々務めてきた朝倉氏はこうして滅亡したのです。なお、その後は息つく暇もなく浅井氏も攻め込まれ、瞬間に滅んでいます。



本能寺の変

本能寺の変(ほんのうじのへん)は、天正10年6月2日(1582年6月21日)早朝、京都本能寺に滞在していた織田信長を家臣・明智光秀が謀反(むほん)を起こして襲撃(しゅうげき)した事件である。信長は寝込みを襲われ、包囲されたのを悟ると、寺に火を放ち自害して果てた。信長の嫡男で織田家当主信忠は、宿泊していた妙覚寺から二条御新造に退いて戦ったが、やはり館に火を放って自刃した。2人の非業の死によって織田政権は崩壊し、天下人となった光秀であったが、中国大返して畿内に戻った羽柴秀吉に山崎の戦いで敗れて、僅か11日後に光秀もまた同様の運命を辿(たど)った。この事件は戦国乱世が終息に向う契機となったので、戦国時代における最後の下剋上とも言われる。光秀が謀反を起こした理由については、史学的には重要な研究テーマと見られておらず、定説が存在していない。一方で「日本史の謎」「永遠のミステリー」などと呼ばれている。

背景

天正10年(1582年)3月11日に武田勝頼・信勝親子を天目山に追い詰めて自害させた織田信長は、3月27日、2日に名城・高遠城(たかとお)を攻略した信忠に、褒美(ほうび)と共に「天下支配の権も譲ろう」との言葉も贈って褒め称(たた)えた。信長は甲府より返礼に来た信忠を諏訪に残して軍勢を現地解散すると、僅かな供廻(ともまわり)だけをつれて甲斐から東海道に至る道を富士山麓を眺めながら悠々と帰国の途に就いた。4月3日には新府城(しんぷじょう)の焼け跡を見物。かつての敵、信玄の居館・躑躅ヶ崎館(つづじがさきやかた)跡の上に建てられた仮御殿にしばらく滞在し、4月10日に甲府を出立した。長年の宿敵を倒し、立派な後継者の目途(めど)もついて、信長にとって大変満足な凱旋となった。

天下を展望すると、東北地方においては、伊達氏・最上氏・蘆名氏(あしなうじ)といった主な大名が信長に恭順(きょうじゅん)する姿勢を見せており、関東では後北条氏(ごほうじょう)がすでに天正8年(1580年)には同盟の傘下に入っていて、佐竹氏とも以前より外交関係があったので、東国(とうごく)で表だって信長に逆らうのは北陸の上杉氏を残すのみとなった。北条氏政・氏直親子は甲州に共同で出陣する約束をしていたが、戸倉城を攻略した後は何ら貢献できなかった。3月21日に酒・白鳥徳利を、26日には諏訪に米俵千俵を献じ、4月2日には雉(きじ)500羽、4日には馬13頭と鷹3羽と、短期間で立て続けに献上品を送って誼(けん)を厚くしようとした。しかし、この時の馬と鷹はどれも信長が気に入らずに返却されてる。他方で、信長は長年の同盟者である徳川家康には駿河1国を贈ったが、家康は領を通過する信長一行を万全の配慮で接待し、下土に至るまで手厚くもてなしたので、信長を大いに感心させた。これら信長の同盟者はもはや次の標的とされるよりもその威に服して従属するという姿勢を鮮明にしていた。

西に目を転じると、中国地方では、毛利氏との争いが続き、四国でも長宗我部氏が信長の指図を拒否したことから交戦状態に入ったが、九州においては大友氏と信長は友好関係にあり、島津氏とも外交が持たれていて、前年6月には准三宮(じゅうさんぐう)近衛前久を仲介者として両氏を和睦させたことで、島津義久より貢物を受けている。信長は天正9年(1581年)8月13日、「信長自ら出陣し、東西の軍勢がぶつかって合戦を遂(と)げ、西国勢をことごとく討ち果たし、日本全国残るところなく信長の支配下に置く決意である」、その意向を繰り返し表明していたが、上月城での攻防の際は重臣が反対し、鳥取城攻めの際には出陣の機会がなかった。その間に伊賀平定を終えて(高野山を除

く)京都を中心とした畿内全域を完全に掌握したことから、次こそ第3次信長包囲網を打倒し、西国最大の大名である毛利氏を討つという意気込みを持っていた。

他方で信長は、天正6年(1578年)4月9日に右大臣・右近衛大将(このえたいしょう)の官位を辞して以来、無官・散位(さんに)のままであった。正親町天皇(おおぎまちてんのう)とは誠仁親王(さねひとしんのう)への譲位を巡って意見を異にし、天正9年3月に信長は譲位を条件として左大臣の受諾(じゅたく)を一旦は了承したが、天皇が金神(こんじん)を理由に譲位を中止したことで、信長の任官の話もそのまま宙に浮いていたからである。そこで朝廷は、甲州征伐の戦勝を機に祝賀の勅使として勸修寺晴豊(かんしゅうじはるとよ)(誠仁親王の義兄)を下し、晴豊は信長が凱旋した2日後の天正10年4月23日に安土に到着した。『晴豊公記』によれば、4月25日に信長を太政大臣(だじょうだいいじん)か関白か征夷大将軍(せいいたいしょうぐん)かに推挙するという、いわゆる「三職推任」を打診し、5月4日には誠仁親王(さねひとしんのう)の親書を添えた2度目の勅使が訪問したと云う。2度の勅使に困惑した信長が、森成利(蘭丸)を晴豊のもとに遣(つ)わせて朝廷の意向を伺わせると、「信長を将軍に推任したいという勅使だ」と晴豊は答えた。しかし信長は、6日、7日と勅使を饗応(きょうおう)したが、この件について返答をしなかった。そのうちに、5月17日、備中より待ちわびていた羽柴秀吉からの出馬要請が届いた。これを受けて信長は出陣を決意し、三職推任の問題はうやむやのまま、本能寺で受難することになった。

信長と光秀

天正10年(1582年)5月14日、織田信長は(『兼見卿記』によれば)安土城に下向した長岡藤孝に命じ、明智光秀を在荘として軍務を解くから翌日に安土を訪れる予定の徳川家康の饗応役(きょうおう)を務めるようにと指示した。そこで光秀は京・堺から珍物を沢山取り揃えて、15日より3日間、本能寺/2武田氏との戦いで長年労のあった徳川家康や、金2,000枚を献じて所領安堵された穴山梅雪らの一行をもてなした。ところが、17日、備中高松城攻囲中の羽柴秀吉から毛利輝元・小早川隆景・吉川元春の後詰が現れたので応援を要請するという旨の手紙が届いたため、信長は「今、安芸勢と間近く接したことは天が与えた好機である。自ら出陣して、中国の歴々を討ち果たし、九州まで一気に平定してしまおう」と決心して、堀秀政を使者として備中に派遣し、光秀とその与力衆(長岡藤孝・池田恒興・高山右近・中川清秀・塩川長満)には援軍の先陣を務めるように命じた。ただし『川角太閤記』では、単なる秀吉への援軍ではなく、光秀の出陣の目的は毛利領国である伯耆・出雲に乱入して後方を攪乱することにあつたとしている。

ともかく、光秀は急遽(きゅうきょう)17日中に居城坂本城に戻り、出陣の準備を始めた。19日、信長は総見寺(そうけんじ)で幸若太夫(こうわかたいゆ)に舞をまわせ、家康、近衛前久、梅雪、楠長譜(くすのきちょうあん)長雲、松井友閑(まついゆうかん)に披露させた。信長は大変に上機嫌で、舞が早く終わったので翌日の出し物だった能を今日やるようにと丹波田楽の梅若太夫に命じたが、見る見るうちに機嫌が悪くなり、不出来で見苦しいといって梅若太夫を厳しく叱責した。その後、幸若太夫に舞を再びまわせ、ようやく信長は機嫌を直したと云う。20日、家康の饗応役(きょうおうやく)を新たに、丹羽長秀(にわながひで)、堀秀政、長谷川秀一、菅屋長頼の4名に命じた。信長は家康に京・大坂・奈良・堺をゆるりと見物するように勧めたので、21日、家康と梅雪は京に出立し長谷川秀一が案内役として同行した。長秀と津田信澄は大坂に先に行って家康をもてなす準備をするよう命じられた。同日、信長の嫡男(ちやくなん)信忠も上洛して、一門衆、母衣(ほろ)衆などを引き連れて妙覚寺に入った。信忠がこの時期に上洛した理由はよくわかっていないが、家康が大坂・堺へ向かうのに同行するためとも、弟神戸信孝の四国征伐軍の陣中見舞いをする予定

で信長と一緒に淡路に行くつもりだったとも言う。いずれにしても、信忠はこの日から変の日まで妙覚寺に長逗留(ながとうりゆう)した。

26日、坂本城を発した光秀は、別の居城である丹波亀山城に移った。27日、光秀は亀山の北に位置する愛宕山に登って愛宕権現に参拝し、その日は参籠(さんろう)(宿泊)した。(『信長公記』によると)光秀は思うところあってか太郎坊の前で二度、三度とおみくじを引いたそうである。28日、光秀は威徳院西坊で連歌の会(愛宕百韻)を催し、28日中に亀山に帰城した。(『川角太閤記』によると)山崎長門守と林亀之助が伝えたところによれば、光秀は翌29日に弓鉄砲の矢玉の入った長持などの百個の荷物を運ぶ輜重隊(しちようたい)を西国へ先発させていたと云う

29日、信長は安土城を留守居衆と御番衆に託すと、「戦陣(せんじん)の用意をして待機、命令あり次第出陣せよ」と命じて、供廻(ともまわり)を連れずに小姓衆のみを率いて上洛し、同日、京での定宿であった本能寺に入った。信長の上洛の理由もよくわかっていないが、勧修寺晴豊の『日々記』や信孝朱印状によると、実現はしなかったものの6月4日に堺から淡路へ訪れる予定であったと云い、このことから毛利攻めの中国出陣は早くとも5日以降であったと推測され、安土より38点の名器をわざわざ京に運ばせていたことから道具開きの茶会を開いて披露するのが直接的な目的だったと考えられる。博多の豪商島井宗室が所持する檜柴肩衝が目当てで、信長は何とかこれを譲らせようと思っていたとも言われるが、別の説によればそれはついでで、作曆大権(尾張曆採用問題)など朝廷と交渉するための上洛だったとも云う。

6月1日、信長は、前久、晴豊、甘露寺経元(かんろじつねもと)などの公卿・僧侶ら40名を招き、本能寺で茶会を開いた。名物びらきの茶事が終わると酒宴となり、妙覚寺より信忠が来訪して信長・信忠親子は久しぶりに酒を飲み交わした。深夜になって信忠が帰った後も、信長は本因坊算砂(ほんいんぼうさんさ)と鹿塩利賢の囲碁の対局を見て、しばらく後に就寝した

当時の本能寺

本能寺は現在とは場所が異なり、東は西洞院大路、西は油小路通、南は四条坊門小路(現蛸薬師通)、北は六角通に囲まれた4町々(1町)の区画内にあって、東西約120メートル南北約120メートルという敷地に存在した。本能寺は天正8年(1580年)2月に本堂や周辺の改築が施された。堀の幅が約2m~4メートルで深さが約1メートルの堀、0.8メートルの石垣とその上の土居が周囲にあって、防御面にも配慮された城塞のような城構えを持っていたことが、平成19年(2007年)の本能寺跡の発掘調査でも確認されている。当時、敷地の東には(後年は暗渠となる)西洞院川があり、西洞院大路の路地とは接せずに土居が川まで迫り出していて、西洞院川は堀川のような役割を果たしていたようである。調査では本能寺の変と同時期のものと見られる大量の焼け瓦、土器、護岸の石垣を施した堀の遺構などがみついている。河内将芳は「信長が本能寺に、信忠が妙覚寺に、それぞれいることが判明しなければ、光秀は襲撃を決行しなかっただろう」という見解を述べている

本能寺討入

6月1日、光秀は13,000人の手勢を率いて丹波亀山城を出陣した。(『川角太閤記』によれば)「京の森成利(蘭丸)より飛脚があつて、中国出陣の準備ができたか陣容や家中の馬などを信長様が検分したいとお達した」と物頭たちに説明して、午後4時頃(申の刻)より準備ができ次第、逐次出発した。亀山の東の柴野に到着して、斎藤利三に命

じて13,000人を勢ぞろいさせたのは、午後6時頃(酉の刻)のことであった。光秀はそこから1町半ほど離れた場所で軍議を開くと、明智秀満(弥平次)に重臣達を集めるように指示した。明智滝朗の『光秀行状記』によると、この場所は篠村八幡宮であったという伝承があるそうである。秀満、明智光忠(次右衛門)、利三、藤田行政(伝五)、溝尾茂朝が集まったところで、ここで初めて謀反(むほん)のことが告げられ、光秀と重臣達は「信長を討果(うちはた)し天下の主となるべき調儀(ちょうぎ)」を練った。また(『当代記』によれば)この5名には起請文(きしょうぶん)を書かせ、人質を取ったということである。が、同じ京都二条には明智屋敷もあり、動静は把握されていたと考えられる。

亀山から西国への道は南の三草山(みくさやま)を越えるのが当時は普通であったが、光秀は「老の山(老ノ坂)を上り、山崎を廻って摂津の地を進軍する」と兵に告げて軍を東に向かわせた。駒を早めて老ノ坂峠を越えると、沓掛で休息を許し、夜中に兵糧を使い、馬を休ませた。沓掛は京への道と西国への道の分岐点であったが(『川角太閤記』によれば)信長に注進する者が現れて密事が漏れないように、光秀は家臣天野源右衛門(安田国継)を呼び出し先行して疑わしい者は斬れと命じた。夏で早朝から畑に瓜を作る農民がいたが、殺気立った武者が急ぎ来るのに驚いて逃げたので、天野はこれを追い回して20、30人斬り殺した。なお、大軍であるため別隊が京へ続くもう一つの山道、唐櫃(からとう)越から四条街道を用いたという「明智越え」の伝承もある。

6月2日未明、桂川に到達すると、光秀は触をだして、馬の脊を切り捨てさせ、徒歩の足輕に新しく足半(あしなか)の草鞋(わらじ)に替えるように命じ、火縄を一尺五寸に切って火をつけ、五本ずつ火先を下にして掲げるように指示した。これは戦闘準備を意味した。明智軍に従軍した武士による『本城惣右衛門覚書』によれば、家臣たちは御公儀(こうぎ)様(信長)の命令で徳川家康を討ち取ると思っていたとされ、ルイス・フロイスの『日本史』にも「或者(あるもの)は是れ或は信長の内命によりて、其の親類たる三河の君主(家康)を掩殺する為めではないかと、疑惑した」という記述があり、有無を言わず、相手を知らせることなく兵を攻撃に向かわせたと書かれている。一方で『川角太閤記』では触で「今日よりして天下様に御成りなされ候」と狙いが信長であることを婉曲的に告げたとし、兵は「出世は手柄次第」と聞いて喜んだとしている。他方、光秀が「敵は本能寺にあり」と宣言したという話が有名であるが、これは『明智軍記』にあるもので俗説である。桂川を越えた辺りで夜が明けた。先鋒の斎藤利三は、市中に入ると、町々の境にあった木戸を押し開け、潜り戸を過ぎるまでは幟や旗指物を付けないこと、本能寺の森・さいかちの木・竹藪を目印にして諸隊諸組で思い思いに分進して、目的地に急ぐように下知した。

6月2日曙(午前4時頃)、明智勢は本能寺を完全に包囲し終えた。寄手の人数に言及する史料は少ないが、『祖父物語』ではこれを3,000余騎としている『信長公記』によれば、信長や小姓(こしょう)衆はこの喧噪は最初下々の者の喧嘩だと思っていたが、しばらくすると明智勢は鬨(とき)の声を上げて、御殿に鉄砲を撃ち込ん「信長を討果(うちはた)し天下の主となるべき調儀(ちょうぎ)」を練った。また(『当代記』によれば)この5名には起請文(きしょうぶん)を書かせ、人質を取ったということである。が、同じ京都二条には明智屋敷もあり、動静は把握されていたと考えられる。

(明智が者と見え申し候)」と報告するので、信長は「やむおえぬ(是非に及ず)」と一言いったと云う。通説では、この言葉は、光秀の謀叛(むほん)であると聞いた信長が、彼の性格や能力から脱出は不可能であろうと悟ったものと解釈されている。また異説であるが、『三河物語』では信長が「城之介がべつしんか」と尋ねてまず息子である信忠(秋田城介)の謀叛(別心)を疑ったということになって、蘭丸によって「あけちがべつしんか」と訂正されたことになっている。

明智勢が四方より攻め込んできたので、御堂に詰めていた御番衆も御殿の小姓衆と合流して一団となって応戦した。矢代勝介(屋代勝助)ら4名は厩(うまや)から敵勢に斬り込んだが討死し、厩では中間衆など24人が討死した。御殿では台所口で高橋虎松が奮戦してしばらく敵を食い止めたが、結局、24人が尽(ことごと)く討死した。湯浅直宗と小倉松寿は町内の宿舎から本能寺に駆け込み、両名とも斬り込んで討死にした。信長は初め弓を持って戦ったが、どの弓もしばらくすると弦が切れたので、次に槍を取って敵を突き伏せて戦うも(右の)肘に槍傷を受けて内に退いた。信長はそれまで付き従っていた女房衆に「女はくるしからず、急罷(きゅうひ)出よ」と逃げるよう指示した。『当代記』によれば三度警告し、避難を促したと云う。すでに御殿には火がかけられていて、近くまで火の手が及んでいたが、信長は殿中の奥深くに籠り、内側から納戸を締めて切腹した。『信長公記』ではこの討ち入りが終わったのが午前8時(辰の刻)前とする

信長の首と遺体

戦後、明智勢は信長の遺体をしばらく探したが見つからなかった。光秀も不審に思って捕虜に色々尋ねてみたが、結局、行方は分からずじまいだった。(『祖父物語』によれば)光秀が信長は脱出したのではないかと不安になって焦燥(しょうそう)しているところ、これを見かねた斎藤利三が(光秀を安心させるために)合掌して火の手の上がる建物奥に入っていくのを見ましたと言ったので、光秀はようやく重い腰を上げて二条御新造の攻撃に向かった。

後世、光秀が信長と信忠の首を手に来ずに生存説を否定できなかったために、本能寺の変以後、信長配下や同盟国の武将が明智光秀の天下取りの誘いに乗らなかったのもという説がある。後の中国大返しの際に羽柴秀吉は多くの武将に対して「上様ならびに殿様いづれも御別儀なく御切り抜けなされ候。膳所が崎へ御退きなされ候」との虚報を伝え広めたが、数日間は近江近在でも信長生存の情報が錯綜(さくそう)し、光秀が山岡景隆のような小身の与力武将にすら協力を拒まれたところを見ると、それが明智勢に不利に働いたことは否めない。

日本の木造の大きな建物が焼け落ちた膨大な残骸の中からは、当時の調査能力では特定の人物の遺骸は見つけれなかったであろうと、未発見の原因を説明する指摘もある。『祖父物語』によれば、蘭丸は信長の遺骸の上に畳を5、6帖を覆いかぶせたと云い、前述の宣教師の話のように遺体が灰燼(かいじん)に帰してしまうことはあり得ることである。また異説として、信長が帰依していたとする阿弥陀寺(上立売通大宮)の縁起がある。変が起きた時、大事を聞きつけた玉誉清玉(せいぎょくしんにょう)上人は僧20名と共に本能寺に駆けつけたが、門壁で戦闘中であって近寄ることができなかった。しかし裏道堀溝に案内する者があり、裏に回って生垣を破って寺内に入ったが、寺院にはすでに火がかけられ、信長も切腹したと聞いて落胆する。ところが墓の後ろの藪で10名あまりの武士が葉を集めて火をつけていたのを見つけ、彼らに信長のことを尋ねると、遺言で遺骸を敵に奪われて首を敵方に渡すことがないようにと指示されたが、四方を敵に囲まれて遺骸を運び出せそうにもないので、火葬にして隠してその後切腹しようとしているところだと答えた

賤ヶ岳の戦い

豊臣秀吉と柴田勝家が覇権を巡って起きた賤ヶ岳の戦い。前哨戦(ぜんしょうせん)や戦後処理も含めて、一連の戦いをそう呼ぶことが多いのですが、近江(現・滋賀県長浜市)にあった「賤ヶ岳」という舞台での戦闘に決着がついたのが天正 11 年(1583 年)の旧暦 4 月 21 日でした。

秀吉の三法師(さんぼうし)vs 勝家の信孝 「三法師(織田秀信)」

山崎の戦いで明智光秀を討ち、織田信長の仇を取った秀吉は、織田家内での立場を急激に強くしました。

天正 10 年 6 月 2 日本能寺の変を受け、備中高松城の攻城戦から引き返して来た羽柴秀吉が、6 月 13 日に摂津国と山城の国の境に位置する山崎において、織田信長を討った明智光秀の軍勢と衝突した山崎の戦い。他の織田家重臣たちにとって、成り上がり者にこんな行動をさせるのは面白くありません。特に、遠方にいたとはいえ筆頭家老としての責任感と能力を持っていた柴田勝家は、歯嚙(はじか)みするどころの悔しさではなかった。そんな中、「今後の織田家をどうするか」という会議が行われたのが「清洲会議」ここで秀吉は「血統の順からいって、織田信忠(信長長男)様のご子息・三法師様に家督を継いでいただき、我々が守り立てよう」と言いました。一方、勝家は「血統も大事だが、三法師様はまだ幼い。ここは年長の信孝(信長三男)様に継いでいただき、三法師様が成長されてから改めて考えてはどうか」という意見でした。

格別な思い入れのある長浜城をアッサリ譲る

幼君を守り立てるには家臣や親族に相当の団結力がなくてはならず、はたまた別の系統に当主を変えてまた戻す、というのなかなか至難の業です。最終的に他の重臣たちが、「信孝様は一度他家へ養子に行かれていますので、秀吉殿の言う通りにするのが良いだろう」と言ったことで、ここでも勝家は秀吉に後(おくれ)をとるような形になってしまいました。このとき行われた領地の再分配で「ワタシは山城(京都)をいただくので、今までいた長浜(現・滋賀県)とその周辺を勝家殿に差し上げましょう。もちろん、越前も勝家殿のもんです」としており、実現しております。秀吉にとって、長浜城は初めて手に入れた城。しかも当時「今浜」と呼ばれていたのを、信長の「長」の字をもらって改名した場所でした。さらに勝家は、信長の妹かつ、元浅井長政の妻であった「お市の方」を妻に娶(め)っており織田家の重要人物である彼女を、本能寺の変後に妻にするというのは発言力を強めるために重要であり、ゆえに、この清洲会議は【秀吉の一方的な勝利ではなかった】とする見方もあります。

秀吉が真っ先に攻め込んだのは他ならぬ長浜城

清洲会議の後、それぞれの領地に戻った秀吉と勝家は、周辺地域の大名家や他の織田家臣たちを自分になびかせようと動き始めます。調略&外交活動ではやはり秀吉が一枚上手だった。徐々に形勢は秀吉有利に傾いていきます。さらに何回かの小競り合い(物理)が起き、秀吉がいつまでも平穏なままで済ませるつもりがないことが明らかになります。そして清洲会議から約半年後、ついに事態が本格的に動き始めました。

秀吉が、長浜城を攻めたのです。元々が自分の城ですから、どこが攻めやすいかなんて重々承知の上だったことは間違い。そもそも、開戦時の足がかりを作るために譲った可能性もあります。長浜城は、勝家の養子・柴田勝豊が守っていましたが、秀吉の攻め口にあっけなく降伏。時、折しも冬。北陸の勝家がすぐには動けないことは十分に計算し尽くしての行動でした。

絶妙のタイミングで前田利家が戦線を離れる

しかし、勝家も黙って春を待っていたわけではありません。まだ雪解けが終わりきらないうちから兵を出し、両者は直接ぶつかり合います。一ヶ月ほどは一進一退という状況でしたが、ここにきてまたしても秀吉と勝家それぞれの違いが明らかになりました。勝家方はいわば織田家の重臣たちの連合ですから、明確な上下関係がありません。「勝家に絶対従わなくてはならない」という感覚は薄かったでしょう。一方、秀吉方の中核や要所を押さえていたのは、秀吉自身の家臣たちです。黒田官兵衛やいわゆる「賤ヶ岳の七本槍」です。指揮系統がどれだけ徹底されていたかという点において、秀吉は勝家よりも勝っていたということになります。こういった状況下で、勝家方についていた前田利家が突如戦線を離脱するという事態が起きます。

利家の戦線離脱については、明確な記録はありません。「勝家とは主従関係だったが、秀吉とは旧友であり、どちらとも袂を分かちがたかったから」という話もありますが、もしかすると、このタイミングで感情に走ったことを利家自身が認めたくなかったのかもしれませんが。これによって前田軍へ当たっていた秀吉方の軍が一気に勝家本陣へ押し寄せました。勝家は迎撃を諦め、本拠にしていた北ノ庄城へ退却し、賤ヶ岳の戦いは秀吉方の勝利となりました。

北ノ庄城に逃げ帰った勝家は北ノ庄城が秀吉の軍勢に包囲され炎上する中で、お市の方と共に自害。お市の方が茶々、初、江の3人の娘を連れて勝家と再婚して僅か10ヶ月後の事でした。

柴田勝家、享年62歳、お市の方37歳



戦国武将

朝倉義景 あさくら-よしかげ

1533—1573 戦国-織豊時代の武将

越前(福井県)の戦国大名。孝景(貞景の子)の子。初め孫次郎延景と名乗り、天文 21 年(1552 年)年將軍足利義輝に偏諱(へんぎ)の 1 字をもらい左衛門督義景と改める。同 17 年父の死により家督を継ぐ。弘治 1 年(1555 年)一族の重鎮宗滴(そうてき)、ついで景隆を加賀(石川県)に送って一向一揆を攻めたが、翌年義輝の斡旋で和睦した。義輝が死ぬとその第一乗院覚慶が還俗(げんぞく)して義秋と名乗り、永禄 9 年(1566 年)義景を頼って越前に来た。翌年、加賀一揆を背景に越前の有力国人堀江景忠が反乱を起こすが、義秋の仲介で講和が結ばれ、朝倉氏と本願寺はのち義景の娘と教如(きょうにょ)の婚約により盟約を固めた。同 11 年義秋は一乗谷(福井市)で元服して義昭と名乗ったが、その年のうちに織田信長のもとに去り、信長に奉じられて上洛した。

信長は諸将にも上洛を命じたが、義景がこれに応じなかったため、元亀 1 年(1570 年)4 月、若狭(福井県)から越前に侵攻し敦賀を占拠した。このときは北近江(滋賀県)の浅井氏が信長との盟約を破って朝倉方に呼応したため、かろうじて信長は撤兵した。同年 9 月、挙兵した本願寺を信長が囲むと、義景は浅井氏と共に南近江に出陣してこれを牽制(けんせい)。同 3 年信長は小谷城(滋賀県湖北町)に浅井氏を攻め、義景は救援のため出陣して信長軍と対峙するが、12 月突然越前に帰国し、同盟関係にあった武田信玄や本願寺の非難を浴びた。翌年義昭を追放した信長が浅井攻めを再開すると、義景は再び近江に出陣したがかえって敗れ、撤退の途次刀禰坂(敦賀市)の合戦で大敗を喫し、その際多くの重臣が寝返った。8 月 16 日一乗谷に帰った義景は、従弟景鏡(かねなきら)の勧めで大野郡に退き再起を図るが、頼みの平泉寺が応じず景鏡にも裏切られたため、六坊賢松寺で自害した。菩提寺心月寺(福井市)に画像が残る。

浅井長政 あざい-ながまさ

1545—1573 戦国-織豊時代の武将。

北近江(滋賀県)の戦国大名。久政の子。通称新九郎。備前守。南近江の大名六角義賢(よしたか)の偏諱(へんぎ)の 1 字を受けて賢政(けんせい)と名乗り、永禄 2 年(1559 年)義賢の家臣平井定武の娘と結婚させられたが、すぐに離縁。翌年野良田(彦根市)の合戦で六角軍を破ると、重臣らの支持を得て父に代わってその家督を継いだ。同 4 年、賢政の名を捨て長政と改名することで六角氏との対決姿勢を強める。以後積極的に南近江に侵攻し、六角氏の内紛もあってその版図を愛智郡(滋賀県)あたりにまで広げた。永禄 10 年、織田信長が美濃(岐阜県)を平定するとその妹お市(小谷の方)と結婚して同盟関係を結ぶが、元亀 1 年(1570 年)4 月、信長が越前(福井県)の朝倉義景を討つため敦賀まで進むと、突然離反して兵を挙げた。

信長はあやうく危地を脱し、同年 6 月徳川家康と共に近江に侵攻した。長政は朝倉氏の支援を得て、姉川をはさんでこれと戦うが敗北(姉川の戦)。9 月には本願寺を攻める信長軍の背後を突くべく朝倉氏と共に坂本(大津市)に出兵した。12 月、將軍足利義昭の仲介でいったんは和睦するが、以後江北 10 力寺を中心とする一向一揆勢力と連携しながら、横山城(長浜市)の木下秀吉ら信長勢と対峙した。同 3 年 7 月、信長が本拠小谷城(湖北町)に迫ると朝倉氏の来援を得て戦ったが、それに呼応して西進していた武田信玄の到着を待たずに突然朝倉軍が帰国してしまい、勝機を逸した。翌年信長は將軍義昭を追放し、8 月には小谷城に出兵、まずは救援に駆けつけた朝倉氏を越前に追撃してこれを滅ぼし、ただちに兵を近江に返した。

孤立無援となった小谷城で、長政は父に続いて自害し、首は京都で獄門に懸けられた。墓は徳勝寺(長浜市)にある。妻お市と 3 人の娘は助け出され、お市の方はのち柴田勝家と再婚、娘たちは、それぞれ、豊臣、徳川と深い結びつきと

なるのです長女の茶々、のちの淀君は、豊臣秀吉の側室となり、豊臣秀頼を産みます。次女の初は、京極高次に嫁ぎ、豊臣家と徳川家の争いを鎮めるため、和議の使いとして、奔走する役目を担うのです。これは、大阪冬の陣のときになります。さらに、三女の江は、徳川秀忠に嫁ぎ、3代将軍・家光を産みます。豊臣秀頼、徳川家光のおじいちゃんは、浅井長政なんです。

ちなみに、徳川秀忠とお江の娘、勝姫の子孫は、大正天皇の皇后、貞明皇后であり、昭和天皇のお母さん、平成天皇のおばあちゃんなんです。なので、現在の天皇家の祖先はお江の血を引いているのです。

柴田勝家 しばたかついえ

1522－1583 戦国-織豊時代の武将。

安土桃山時代の武将。初名権六(ごんろく)、のち修理亮(しゅりのすけ)と称す。

尾張愛知郡の出で初め織田信長の弟信行に仕えたが、のち信長の家臣として屈指の宿老となる。猛将の誉高く、元龜1年(1570年)籠城していた近江長光寺城(近江八幡市)を六角承禎(ろっかくじょうてい)に攻められたとき、飲料水の瓶を割って城には戻らぬ覚悟で出撃し、敵を破ったことから「瓶破柴田」の異名をとったと伝えられる

天正3年(1575年)9月、信長が越前(福井県)一向一揆を倒すと、同国の支配を委ねられたが、府中(武生市)に佐々成政、不破光治、前田利家らが監視役として置かれ(府中三人衆)、敦賀郡は武藤舜秀(むとうきよひで)に、大野郡の大部分は金森長近、原政茂にそれぞれ与えられたため、越前一国にその支配がおよんだわけではない。

入国すると勝家は北庄(福井市)に9層の天主を持つ城を築き、先に滅びた朝倉氏の城下町一乗谷(同市)から商人、職人を呼び寄せ、寺院を移して新しい町造りを行った。丸岡(丸岡町)に養子勝豊を、袋田(勝山市)には子息勝安を入れて支城とした。また天正4年には7カ条からなる 国中掟 を発布し、百姓が武士の家来になることや、税逃れの目的で他所に移ることを禁じ、家臣には勝家に無断で百姓を人夫に召し使ってはならないことなどを命じた。同年刀狩を実施し、集めた武器を農具や九頭竜川の舟橋の鎖に改鑄(かいちゆう)したとの伝承も残り、民政にも手腕を発揮したことが窺われる。翌年、信長政権下、越前で初めての検地も行っている。同8年、加賀(石川県)一向一揆を平定して越中(富山県)に進み、越後(新潟県)上杉氏と対峙。

同10年の本能寺の変後は、信長の後継者の地位を巡って羽柴秀吉との対立が深まり、翌年4月近江賤ヶ岳(滋賀県木之本町)で対戦したが敗れて北庄に退き、秀吉軍による包囲のなか、同24日北庄城にて妻お市と共に自刃(じじん)した。お市は天正10年(1582年)本能寺の変後、織田信孝の策略で柴田勝

家と再婚したが、翌天正11年(1583年)柴田勝家は賤ヶ岳の戦いで秀吉に敗れ、お市は勝家と共に自害した。
お市の方辞世の句

さらぬだに打ちぬる程も夏の夜の別れを誘ふほととぎすかな

“そうでなくても夏の夜は短いのに、ほととぎすが今生の別れを急がすようです”

これを受けて

勝家公辞世の句

夏の夜の夢ぢはかなき跡の名を雲井に上よ山郭公(ヤマホトトギス)

“夏の夜の夢のように儚(はかな)い人生だつた。山ほととぎすよねせめて我が名を雲の上へ語り伝えてくれまいか”

柴田勝家の菩提寺である西光寺の境内に勝家とお市の方の墓がある。